
あなたに、逢いたい…

ナナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたに、逢いたい . . .

【Zコード】

N7469A

【作者名】

ナナ

【あらすじ】

片想いの沙知は告白を決意する。しかし壁は立ちはだかり次に決意を決めた時には . . .

三ヶ月に一度ある席替えで、見事『気になる人』の隣を引き当てるのは最後から二つ目の席替えのこと。と言つても、引き当てるほど大掛かりなクジでは無くて、ただのあみだくじなのだけれど、それでも私にとつてみれば夏休みとクリスマスが同時に来るより嬉しい。

私はズルズルと机を引きずつて窓際の、後ろから二列目に座った。後から机を押してきた彼を見上げると、彼は

「先生、戸田君悪いらしいんで、席かわります」

と言つて机を後ろに持つて行つてしまつた。

そして隣には、これまた物静かそうな戸田君。

「せめて一言くらい話したかったなあ…」

そう小さく言葉を漏らした時、後ろから肩をトントンと叩かれた。振り返ると、そこにはその彼がいて、私は嬉しくて嬉しくて今まで以上に緊張してしまつた。

「前後の方が話しやすくない？」

その時、急に窓からバツと風が入つて来て彼の香水のいい香りがした。私は余計に硬直してしまつてウンウンと首を縦に振る事で精一杯だつた。

彼はクラスでも人気のある方で、時々違うクラスの子からも告白されていると聞いたことがある。でも、一年になつてからはパタリと付き合つたとか別れたなどの噂はなくなつて、今は私の大好きなバスケットボールを部活ではなく、どちらかのサークルでやつているらしい。

身長は155センチの私よりも遥か高くて178センチある。髪は黒で、パーマをかけたような寝グセが可愛いらしい、良い香りの香水をつけている人。

「篤郎でいいよ、三好さん」

椎名篤郎、だから篤郎。私は一人の中が急に縮まつた感じがして、ここは三好さんのままじゃいけないと思い、自己紹介をした。

「私、三好沙知だから、沙知って呼んで下さい」

緊張と嬉しさのあまり、何故か敬語になつてしまつた。恥ずかしくなつて下を向いていると

「知ってるよ、沙知」

と頭をワサワサと撫でられ笑われた。

凄く凄く、もの凄く嬉しかつた。もう少しど

「好きです」

と打ち明けてしまいそうになる程嬉しかつた。

でもそれと同じくらい、新しい地に足を踏み入れたような不安もあつた。

その日から私は、ノートもまともにとれない程の緊張と、先生の話が頭に入らないくらいのお喋りに時間潰した。それもこれも篤郎が面白いせい。

話していることは全く馬鹿な話で、嫌いな先生の愚痴や、お互いの似顔絵製作。昨日見たテレビ番組の話や、恥ずかしかった体験談とか。まるで、ずっと昔から仲良しだった友達みたいに気が合つて、仲良くなつて、休み時間さえもずっと喋つていた。

そのうちに一緒に遊んだりもするよつになつて、ますます仲良くなつて来た頃、要約色んなクラスで、付き合つているんじゃないかなという噂がたつようになった。私の方も、気付けば篤郎が『気に入る人』から『好きな人』になつていて、噂は内心嬉しかつたのだけれど、篤郎にしてみればこういう事は反対にうとましい事なのかもしれないと思つた……。

きつと今私は、誰より篤郎の傍にいる。誰よりもお互いを支えあつてている。なのにソコに恋愛というモノは生まれなくて、きっとまれに見ない男女間の真の友情とやらモノを築き上げてしまつたのかもしれない。距離が近くなつたために、やり方を間違えたことにも気付かずに進み過ぎてしまったのだろう。

それでも私は篤郎の傍にいたい。篤郎が好きだよ。

だから、やっぱり少しの期待もしてしまった。この噂のまま、二人が流されて付き合ひやえればいいのに、なんて……。

学校が冬休みに入つて、噂は噂として薄れていった。

私と篤郎はとくと相変わらず仲良くやっている。

この冬休みは、受験勉強に追わられて篤郎とは遊べないけれど、メールは毎日欠かさずやっている。と、これだけ聞けば、いい感じの恋人のように聞こえるけど、受信されてくるメールといえば、やっぱり馬鹿な話ばかり。そりや送信するメールも馬鹿な話ばかりだけれど、これが何も飾つていらない素の私で篤郎だと思うから、それでいい。

だつて、綺麗に飾りたてた人なんときつと本心では付き合えないから……。

クリスマス・イヴも寂しく過ぎ去つて、受験生生活の私には大きなストレスだけがたまっていた。そんな中、ふと篤郎の事を考えていたその時、連絡もなく誰に場所を聞いたのか、急に篤郎が家まで来た。

サンタクロースの恰好で。「メリークリスマス……」

「篤…郎…？」

「結構この恰好恥ずかしかったんだぞ、ほらプレゼント…つてほどのもんじゃないけど……」

差し出されたものを受け取ると、それは雪だるまだった。決して可愛いといえる顔ではないけれど、篤郎の温かみが伝わった。「あらがとう。雪降ってたんだね、知らなかつた」

「…ホワイトクリスマスだ」

「ほんと、綺麗……」

久しぶりに篤郎の顔を目の前にして、初めて話した日のよつな緊張が背筋を走った。ああ、このまま時間が止まればいいのに……。

「沙知は南高受けるんだっけ？」

篤郎に比べれば私は本当にバカで、普通の女の子なら恥ずかしそうに『うん』と答えるのだろうけれど、私は

「ウン」

と声高らかに答えた。

そう、私達はそういう関係だ。

「そつか、そつか、じゃ俺もソコにしょ」

私はギョッとした。

「でも篤郎は南高よりずっとレベルの高い学校に行けるじゃん」

篤郎は無言でクルッと180度まわると歩き出した。

「篤郎……？」

「俺さ、今すっげえ楽しいんだ。」

篤郎は顔だけをこちらに向けて言った。

「俺、また沙知と同じクラスになりたいから」

それだけ言うと手を振って、また歩いて行ってしまった。

「篤郎……」

その後ろ姿は、今すぐ走つて行つて抱きしめたくなるほど愛おしかった。

雪だるまは、使わなくなつた冷蔵庫に電気をとおして冷凍庫に大切に保管した。

1月1日、年もかわり新年を迎えた私は、早朝から玄関先で篤郎の迎えを待つっていた。冬休み前から約束していた『初詣』だ。

「あんた新年早々オシャレねえ。着物は着てかないの？」

「あ、お母さん。おはよつ、着物は着ていかないよ」

「そつ。気をつけていってらっしゃい」

「はい、お母さん」

「あ、あの……」

ふと見ると篤郎が玄関に立つていた。

「あら、こりつしゃい」「

「あ、明けましておめでとうございます」

篤郎は母を目の前にして、緊張しているのか声がうわづつていた。

「あけおめ篤郎。じゃお母さん行ってくるね」

「いってらっしゃい」

玄関を出ると篤郎は私の手を自分のポケットに入れてくれた。そこはとても温かくて、手袋をしている本人がどういう理由でポケットに手を入れていたのだろうと思つたけれど、それが私のためだと気付いた時には、そのさりげない優しさが凄く身に染みた。

神社に着けばクラスの子や知った子が沢山来ていてひやかされた。

私は笑つて交わした。篤郎も笑つっていた。

私達は、賽銭箱に賽銭を入れると鐘を鳴らし、手を合わせて田をつむつた。お互に何を願ったのかは聞かなかつた。ただ私は…ずつと篤郎の傍にいたい…と願つた。

その後、私達はおみくじを引いて、篤郎は中吉で、私は大吉。お守りも買つて、篤郎は健康祈願。私は恋愛成就。

「沙知、好きな人いるの？」

「え？ うん、まあね…」

「…そつか」

篤郎は少し寂しそうな顔をした。

「篤郎？」

「あっカステラ！！」

篤郎は顔色をパツとかえて、私の手をとると、出店に走りだした。

「おっちゃん、カステラ大きいやつで」

「はいよ、千円になります。可愛い彼女連れてー」

「あはは、彼女じゃないスよ」

分かつてはいたけど、彼女ではないことは分かつていたけれど、少し悲しくなつて、少し泣きそうになつた。

「はい、コレ持つて帰れよ」

「あ、ありがとう」

私は笑つたけれど、上手く笑えてるかな、どうしてもさつきの言葉

が頭に残つて上手く笑えない…苦しい…

「沙知、帰ろつか」

…えつ？ 「でも……」

「カステラ冷めちゃうもんね」

「…うん。… そうだね」

そうして私は、本当にカステラが冷める前に家に着いた。

「早かったのね、夕方あたりになるのかと思ってたからお祖母ちゃんに沙知はデートだから今日は行きませんよって言っちゃった」

デートか……。

「いいよ、今日は家にいる」

「そう? なら夕方には戻るからね」

「うん。 いつへらっしゃい」

短い冬休みは、寒さだけを残して過ぎ去り、寒気が絶えぬ中、とうとう卒業式が訪れた。

いつもはジャージ姿の先生達も、ピシッとしたスーツに身を包んで、慣れないネクタイに苦しそうだった。

「中村咲」

「はい」

「成瀬美穂子」

「はい」

一人一人名前を呼ばれてゆく。

中にはもう泣いている先生もいて、生徒は、まだ校歌も唄わぬうちに泣きだしていた。

私はまだ泣くまいと思っていたが、皆につられてやはり泣いてしまつた。小学校からの親友や、周りの友達の中には、進学する高校が違つて離れてしまう子もいる。『離れても、また遊ぼうね』と約束はしているけど、中にはもう一度と会えなくなるかもしれない子だつていると思う。そう思えば涙が溢れてきて、式中にもかかわらず、皆わんわん泣いた。

卒業式も無事終わり、担任の先生から、卒業証書の入った筒を貰つて皆各自の家へ帰る頃、まだ涙のおさまらない私の傍に篤郎がやつてきた。

「泣くなつて、同じ校区に住んでるんだからいつでも逢えるつて」そう言つて篤郎は、私の頭を自分の肩に寄せてくれた。急に優しくされて、余計に涙が出てきた。卒業するにあたつて、友達は

「椎名君に告白すればいいのに」と言つてくれたけれど、高校生になつても一緒にだしどう余裕が私にはあつたから

「いいよ、まだ」

と断つた。でもこの決断が、私にとつて人生最大の後悔となる事をこの時の私はまだ知らなかつた。

タンポポが鮮やかな黄色に色づいた頃、見事二人して南高に受けた私達は、残念ながらクラスまでは一緒とはいかなかつた。

それでも登下校は一緒に、しばらくのうちは自転車に一人乗りして帰つていた。けれど、

「俺バスケ部に入るよ」

篤郎は、仲のいい先輩に誘われたか何かで部活動に入つてしまつた。それからは、高校の席が近くて仲良くなつた真那と家の方向が同じなので、一緒に帰るようになつた。

真那は美人で、それなのに馬鹿なことを平氣で言つて人を笑わせる子だからクラスでも人気者だつた。サラサラの長い髪が似合つていて、身長も私より高い。

まるで本当に私のお姉ちゃんみたいな存在で、真那も私を妹のように可愛いがつてくれた。

一方、篤郎は二年の先輩達を抜いて試合の選手に抜擢されるなど、入部して間もないのにもかかわらず好成績をおさめ、部には無くてはならない存在となつていた。

それからは、ちょくちょく篤郎に試合を見に来いと誘われて、真那を連れて何度か見に行つた。バスケをする篤郎はいつもに増してかつこよくて、つい見とれてしまつ。そして、周りを見れば知らない学校の女子生徒までもが篤郎を応援している。私はそれが凄く不服で、『同じクラスになることが出来たら告白しよう』と決意した。それからも普通に篤郎と喋つて、普通に篤郎と遊んだりした。廊下ですれ違い様にピースするのも習慣になつて、中学の時からだから、もうすぐ一年になる。

篤郎は昔と変わらない同じ笑顔で私に笑いかける。

昔と変わらない同じ手で髪を撫でる。なのに、昔に比べて知らない篤郎が増えた気がする。やつぱり私、篤郎と同じクラスがいいよ。私の知らない篤郎がいるのが凄く不安。

一年生になつて、クラス替えの紙が廊下に大きく張り出された。

「沙知何組？」

真那は真剣な顔で私を見た。

「私2組だよ、真那は？」

「一緒だあ、よかつた。離れたらどうしようかと思つたあ」

私達はその場で抱きあつてはしゃいだ。

「沙知2組があ、俺も2組！」

そう言つて篤郎は顔の前に大きくピースを作つた。やつたあ、また前みみたいに楽しくなる。そして、ちゃんと告白する。私の決意はかたかつた。

「やつたじやん、篤郎」

私と篤郎は手のひらを合わせてパチンッと叩いた。

その後の席替えで、私は篤郎と真那から少し遠い所になつて、篤郎は窓側で真那の後ろの席になつた。

夏休みを一週間前に控えた日の晩、私は5時間迷つた末、一番シンプルかつ素直なラブレターを書き終えた。

『篠郎が、好きです』

明日の昼休みになつたら中庭に呼び出して渡そう…

次の日、私は朝から緊張の連続で、絶え間無く波打つ心臓の高鳴りに、授業中の先生の声は全く耳に入らなかつた。そして、4時限目終了のチャイムが鳴つて、お昼の時間になつた。

私の緊張はもう頂点に達していて、ラブレターを持つ手は汗ばんで力が入つていた。私はゆっくり踏み出した。

「……篠」

その時、真那が私を呼び止めた。

「沙知つてさあ、椎名君と幼なじみ？」

真那はいつになく不安そうな顔だつた。

私は篠郎の名前が出たことに動搖した。

「違うよ、中学の時に同じクラスだつただけ」

「そつかあ、よかつたあ。あのねコレ沙知にしか言わないから誰にも言つちゃダメだよ」

私は嫌な予感がした。今両手で耳を塞げば聞かなくて済む。けれどもう遅かつた。

「椎名君のこと好きなんだ。沙知、椎名君と仲いいじやん、相談のつてよ」

まるで少女漫画のストーリーのようだ。

私は、自分の後ろ手に持つていたラブレターをくしゃつと丸めた。真那の話はそれからも続いた。

でも、私は真那がその後何を話したのか全く覚えていない。運がどうとか言つのは好きじやないけど、この時ばかりは運の悪さを認めざるおえなかつた。

それから一週間、私は真那と何を話したか知らない。でも、篠郎の話には変わりなくて、唯一覚えているのは『椎名君凄くいい香りするんだよ、風が吹いたときに後ろから凄く匂うの』

『待つてよ』って思った。それは私の場所だつて言つたかった。

でも、篠郎は私のモノじやないから私がとやかく言える立場じやな

い。篤郎が真那と付き合つても私は何とも言えない。ただ去ることしか出来ない。

それから間もなくして真那の中での決心はついたみたいだつた。
私は心にもないきれいごとを並べて応援したのだろう。

真那は告白した。

私は情けなくて、一人裏庭で泣いた。

真那の告白の結果は聞いたか聞かなかつたか覚えていない。ただ、真那が篤郎のことを『篤郎君』と呼ぶようになつたから、きっと篤郎はOKを出して二人は付き合い出したんだろうなって思った。どうしても直接篤郎の口から聞くのが怖くて私は篤郎から離れた。二人は、一学期の終業式の日まで前後の席で仲良く喋つていた。

「最近喋つてないな……」

独り言が出た。

こんなことなら同じクラスじゃない方がよかつた。違うクラスなら、見たくないモノも見ないで済む。聞きたくないコトも聞かなくて済む。辛くなくて済む。

苦しくなくて済む。泣かなくて済む。
でもやつぱり私は、アナタが好きです。どうすればいいのかわから
ないけれど、どうしても篤郎が忘れられない。

それでも夏休みは容赦なく訪れた。また私の知らない篤郎が増え
ていく。想いはこのまま消えちゃうのかな……

そんな時近所のコンビニで、同じクラスで篤郎と同じバスケ部の潤に会つた。「…三好さん？」

「あっ、中原潤！！」

潤とは小学校から一緒で、今までお互い全然興味なかつたのに、この日は変に意気投合して、半ば初対面の彼に恋の相談までのつもらつた。次の日も、教えて貰つたアドレスにメールを送つて相談して、その度に潤は真剣に長い返事を返してくれた。

『好きだって思う気持ちはどうしても変えられないからさ、好きな好きのままでいいと思うよ。友達だからって自分の気持ち殺すの

つて絶対後悔するから自分の気持ちに素直でいたらいよ』

夏休みも終わりにさしかかった頃、突然真那から電話がかかってきた。

「沙知、ごめんね。沙知ずっと篠郎君のこと好きだったんだよね」「えっ?」

「見てたらわかるよ。私、篠郎君とは付き合ってないよ。沙知は何か勘違いしてたみたいだけど、私フランクだもん。だからさ、沙知頑張つて」

私は電話を切つてから急いで篠郎の家に向かった。雨がパラパラと降りだしていただけど、そのまま走つていった。

言わなきやいけない。ちゃんと伝えなきやいけない。正直、少し諦めてた。でも私言うよ。今度は手紙なんかじゃなくて、ちゃんとこの口で言う。

篠郎の家の前に着いた時には、雨は大雨になっていた。その時、ずぶ濡れになつた服のポケットに入つていたケータイにメールが来た。

『椎名がスリップした車にひかれた。桜谷中央病院に運ばれたから早く来て』

潤からだつた。私は急に足がガクガクして力が入らなくなつて歩けなくなつていた。

「早くつて何?早く行かないと間に合わないってこと?」「私は腰が抜けたその場に座つてしまつた。

オドオドして嫌な想像までして、ただただどうしようもなく、その後自力でタクシーを呼び、病院まで急いでもらつた。

病院の玄関では潤が待つていて、篠郎がいる部屋まで案内してくれた。部屋に入ると篠郎が部屋の真ん中にあるベッドで顔に白い布をのせて寝ていた。

傍には部員の人人が何人かいて、皆俯いていた。

「あ、篠郎、私心配したよ。どうしようかと思つた。篠郎は本当に

危なつかしいんだから。でもね篤郎、私篤郎が好きだよ。本当は席が前後になる前から好きだつた。ねえ篤郎、寝てないで何か言ってよ。ねえ、篤郎つてばー」

「…やめろよ、そういうの。皆悲しいんだからーー！」

潤が怒鳴った。

知つてるよ、わかってる。わかってるけど信じられない。信じたくない。

だつて我还是何も伝えてないもの。何も言えないもの。

「死んでるんだよ、篤郎は。打ち所が悪かつたんだよ…それでも最初はまだ少し息してたよ。必死に生きようとしてた。けど、病院に搬送される途中の救急車の中で……」

「嘘よ、篤郎は生きてる。今だつて私を驚かそうとしてるんでしょう？笑つて『騙されてやんの』とか言うんでしょう？」

「言わないよ…」

潤は首を横に振つた。

病室は篤郎の香水の香りでいっぱいだつた。

「だつて篤郎の手はこんなにも温かいじゃない

私は篤郎の手を取つた。少し重かつた。

「唇だつて紫じやないよ」

篤郎の顔は寝ているように綺麗だつた。

「これからなるよ…」

潤は怒つたような強い口調を抑えた。

「…廊下に出よう、沙知」

潤は私を支えて部屋を出た。その時、すれ違ひに篤郎の両親と思われる二人が部屋に入り、部屋からは一人の嘆く声が聞こえた。

私はヒステリックになつていた。潤は暴れる私の手を押さえて必死に私を静まらせよつとした。

「…落ちつけよ、ここ病院だから声おさえて

「離してつー離してよー！触らないでっ。もつ嫌あーーー何も知らないくせに。離せよー私死ぬのーツ！ーーあ、ああ

「

“パンツ！”

潤のビンタが私の頬にじんと響いた。

まるで、高い崖から突き落とされた気分だった。

「そんな…」

それ以上言葉に出来なくて、どう現していいのかわからない悲しみが込み上げてきて、長イスの横に倒れ込んだ。

「篤郎は生きてるよ」

そう言わなければ自分自身が消えちゃうそうで、私は狂ったように一週間程そういう言い続けた。

“ねえ篤郎、私はやつぱりどこかで道を間違えていたかな？引き返すにはもうすでに遅すぎたんだね”

篤郎が病院のベッドから消えてちゅうび一ヶ月がすぎた。私は夏休みが終わってもまだ立ち直れず家にいた。

中学三年生の時に篤郎がくれた雪だるまは、篤郎が死んだ日冷凍庫の中で溶けて水になっていた。一年以上も保っていたのに、まるでそれが篤郎だったかのように溶けて跡形もなくなっていた。

「ねえ篤郎、雪はまた来年も降るんだよ。その時篤郎はどうしているの？」

ねえ篤郎、雪は溶けても、水になつても、また雪になるんだよ。篤郎の雪だるま溶けちやつたよ。私には篤郎の雪だるまは作れない。篤郎がいなきや意味無いよ。篤郎、ねえ戻ってきて…」

私は冷凍庫の前で溶けた雪だるまを何度も手ですくつた。一滴一滴が篤郎に見えて仕方がなかつたから。

10月1日。この日は篤郎と初めて喋つた日。そう、あの中学の

席替えの日。

そして今日は、それから2年後の10月1日。

私は、あれから徐々に落ち着きを取り戻し、篤郎の家へ行くことにした。お通夜もお葬式も行けなかつたから、篤郎に逢いたくて。

篤郎の家の前まできて少し息が苦しくなつた。一ヶ月前、私はこの場所で信じられない報告を聞いた。

私は目を閉じて『もう大丈夫、もう大丈夫』と何度も心の中で思つた。

それでも、今インターフォンを鳴らせば、玄関から元気いっぱいの篤郎が笑顔で出てきそうな、そんな気になつた。

でも、出てきたのは当たり前のごとく篤郎のお母さんだ。

「はじめまして、三好沙知です。急にすみません」

篤郎のお母さんは名前を聞いただけで入れてくれた。

「あなたが三好沙知さんなのね、篤郎からよく聞いてました」

そういうと仏間に通してくれた。私は仏壇の前で手を合わせた。けれど、何も心に言葉は浮かばなくて、ただひたすら田をつむつて涙をこぼれた。

今私が泣いたら、お母さんまで涙、ふりかえしちゃうから、泣いたらいけない。

「沙知ちゃん、まだ篤郎の部屋そのままにしてあるの。よかつたらどうぞ」

お母さんは案内してくれた。階段をあがつて右にある、陽の光が差し込む綺麗な部屋。

使つて途中になつたままのモノや、閉め忘れたペンの蓋が、まだ篤郎がいるのではないかと思わせる。

篤郎はいない。

私の想いも届かなかつた。伝えたかつたのに、伝えられなかつた。今更後悔しても遅いよね。篤郎はまた一人知らない所へ行つてしまつた。

ねえ逢いたいよ、篤郎。

その時、フワッと一枚の白い封筒が上の棚から落ちてきた。まるで、読んでほしいかのように。

私は封筒を拾いあげて、封の開いている所から一枚の便箋を取り出した。

それには、私宛の手紙が書かれていた。

「三好沙知さんへ

本当は俺、中学二年の時から沙知を知つてたよ。

一日惚れだつたんだ。それからずつと沙知の事が好きでした。沙知がバスケしてる子がタイプつていうの聞いたから急いでサークルに入つたくらい。俺つて単純だろ？（笑）でも俺本気だよ？沙知には他に好きな人がいるみたいだけど、やっぱりこれだけは言いたいからさ。俺は、沙知が大好きです。

椎名篤郎より

私の心は焼けそうなほど熱くなつた。そして、今まで我慢していた涙が堪えきれなくなつて溢れ出した。それは両手では抑えきれない程沢山で抑えきれない程苦しくて、私はお母さんに一礼だけして家を飛び出した。

近くの公園まで走つて、走つて、走つて、泣き崩れて、地面を叩いた。

もう周りなんて見えない、見たくない。ただ今はどこへ行つても、その場所には篤郎との思い出だけしか残つていなくて、なのに篤郎はいなくて、もう一度と二人で思い出は増やせなくて、目を閉じても浮かぶのは篤郎の顔で、寂しくて、伝えたくて、伝わらなくて、心が痛い。悔しくて、悔しくて、やりきれない。

学校の教室も、帰り道も、いつものゲーセンも、初詣に行つた神社

も、海も空もこの街も一人で見てきたモノ全てに篤郎との思い出が詰まっている。溢れるくらい沢山…。

「篤郎がいない世界なんてモノクロの写真と一緒に寂しそぎる……。

「篤郎は私よりずっとずっと長い間私を見ていてくれてたんだね。まだ篤郎と出会っていなかつた私を、篤郎の事を知らなかつた私を、ずっと知つていてくれてたんだね。何もかもが私のためで、最後まで私のために頑張つてくれてた。こんなに近くにいたのに。こんなにも想い合つていたのに、近すぎて、時間がありすぎて、すれ違いすぎてたね。もう戻れないけど……誤解まではさせたくないなかつた…恋愛成就のお守りは篤郎のことなのに……」

お互い温め続けた想いは、とても深いもので、もつたいぶつたために私達はいつか出会うはずだつた運命のレールを踏み外してしまつていた。

小さな過ちは、本人の知らぬうちに大きく膨らみ、大きな余裕は跡形もなく消えていた。

“もつと早く言えばよかつた。『好き』といったつた一文字の言葉だけなのに。そしたらもつと何かが大きく変わつていて、また違う結末を迎えていたかもしない…一人で…”

篤郎の席は今も尚私達の教室にある。皆篤郎の話はしないけれど、それぞれの胸の中には今も笑つている篤郎がいる。

今私の席は、ちょうど中学三年の秋の時と同じ窓側の篤郎の前。そして篤郎は今も私の後ろの席にいてくれる。だつて、窓を開ければ入つてくる風はいつもあの時の香水の香りだから。

篤郎がいなくなつて今日で一年がたとつとしている。あの頃制服を着ていた私ももう19歳になつた。

今年も雪は降る。

それは篤郎が私の傍にいてくれている証拠。そつ思つよひしてい

る。

あの時流した溢れんばかりの涙を篤郎は綺麗な雪へと変えてくれる。

『さよなら篤郎

ありがとう大好きだよ
ずっとずっと……』

END

(後書き)

最後まで読んで下さりありがとうございました。感想をいただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7469a/>

あなたに、逢いたい…

2011年1月15日07時46分発行